



## 令和 8 年度病害虫発生予報第 6 号

令和 8 年 8 月 5 日  
鳥取県病害虫防除所

## 予報の概要

| 区分   | 農作物名      | 病害虫名       | 発生時期  | 予想発生量     |
|------|-----------|------------|-------|-----------|
| 普通作物 | イネ        | いもち病（穂いもち） | 平 年 並 | 平 年 並     |
|      |           | 紋枯病        | —     | 多 い       |
|      |           | セジロウンカ     | —     | 平 年 並     |
|      |           | トビイロウンカ    | —     | 平 年 並     |
|      |           | 斑点米カメムシ類   | —     | やや多い      |
|      |           | コブノメイガ     | —     | 平 年 並     |
|      |           | フタオビコヤガ    | —     | 少 な い     |
|      |           | ダイズ        | 紫斑病   | 平 年 並     |
|      | ハスモンヨトウ   |            | やや早い  | やや多い      |
|      | カメムシ類     |            | 平 年 並 | やや多い      |
| 果樹   | ナシ        | 黒斑病        | —     | やや少ない～平年並 |
|      |           | ハダニ類       | —     | やや多い      |
|      |           | シンクイムシ類    | 平 年 並 | やや多い      |
|      | カキ        | うどんこ病      | 平 年 並 | 平 年 並     |
|      |           | 炭疽病        | やや遅い  | 平 年 並     |
|      |           | カキノヘタムシガ   | 平 年 並 | 平 年 並     |
| 果樹共通 | カメムシ類     | —          | やや多い  |           |
| 野菜   | ネギ        | 軟腐病        | —     | 平 年 並     |
|      |           | 白絹病        | —     | やや多い      |
|      |           | 黒斑病        | —     | 平 年 並     |
|      |           | ネギハモグリバエ   | —     | やや多い      |
|      |           | ネギアザミウマ    | —     | やや多い      |
|      |           | シロイチモジヨトウ  | 平 年 並 | 平 年 並     |
|      |           | ナガイモ       | 炭疽病   | 平 年 並     |
|      | ナガイモコガ    |            | 平 年 並 | 平 年 並     |
|      | ハダニ類      |            | 平 年 並 | 平 年 並     |
|      | シロイチモジヨトウ |            | 平 年 並 | 平 年 並     |
|      | ブロッコリー    | ハスモンヨトウ    | 平 年 並 | やや多い      |



## 気象予報（抜粋）

1 か月予報（8 月 1 日～8 月 3 1 日：7 月 3 0 日、広島地方気象台発表）

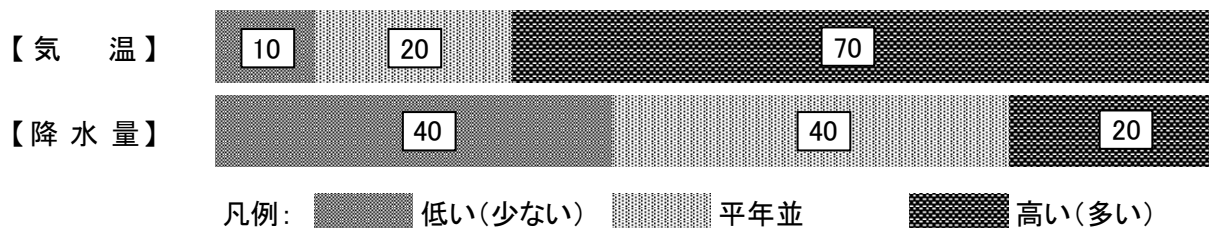
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

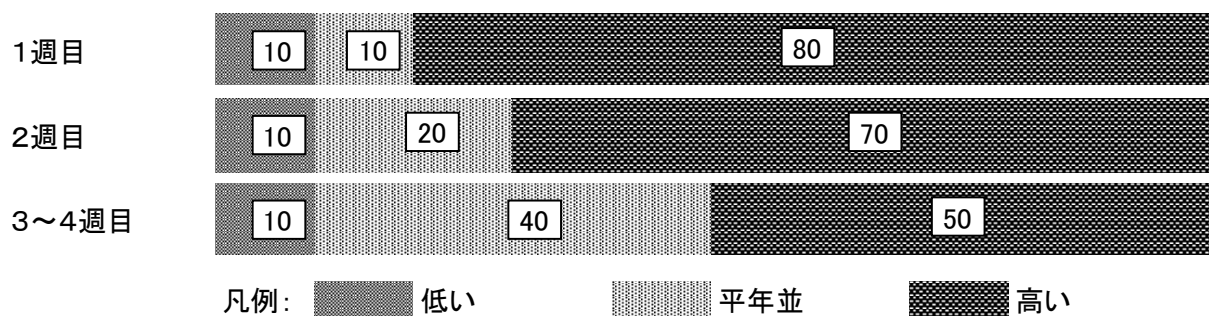
向こう 1 か月の平均気温は、高い確率 7 0 % です。

週別の気温は、1 週目は、高い確率 8 0 % です。2 週目は、高い確率 7 0 % です。3～4 週目は、高い確率 5 0 % です。

### <向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



### <気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### [イ ネ]

#### 1 いもち病（穂いもち）

##### （1）予報の内容

発生地域 県内全域

発生時期 平 年 並

発 生 量 平 年 並

##### （2）予報の根拠

ア 7 月下旬の現地ほ場（巡回調査定点地区）の葉いもち発生ほ場率は 3. 3 %（平年：6. 9 %）と、平年より低い。

イ 一部の常発地では中発生以上のいもち病（葉いもち）発生ほ場が点在している。

ウ 7 月下旬現在、水稻の出穂期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

エ 葉いもちの発生状況及び向こう 1 か月の気象予報から、本病の発生は平年並と予想される。

##### （3）防除上注意すべき事項

ア 穂いもち防除は予防防除を基本とする。なお、中間地～山間地等の葉いもちの発



- 生が多い地域では、穂いもちの発生が懸念されるため、防除を徹底する。
- イ 粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に散布する。なお、降雨が続く場合は、雨の止み間をみて防除を行う。この場合、散布後から降雨が3時間程度なければ、防除効果は十分にある。
- ウ まだ出穂していない中生品種等において、粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布する（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認し、止水期間は1週間程度とする。また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。
- エ 「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」、「きぬむすめ」等のいもち病に弱い品種の栽培、窒素肥料の多施用、遅植え等の条件では特に発生しやすい。
- オ 鳥取県では、平成26年にストロビルリン系薬剤耐性イネいもち病菌の広域発生が一部の地域で認められ、平成27年以降、本系統薬剤の使用を中止していた。しかし、その後のモニタリング調査から、現地ほ場において耐性菌が生存している可能性は低いと考えられたため、令和5年から県内全域の一般ほ場において、本系統薬剤の本田地上散布剤及びヘリ防除剤の使用を可能としている。ただし、耐性菌の再発生を防ぐために、本系統薬剤の同一年における連用と採種ほ場及びその周辺ほ場における使用を控える。
- カ 葉いもちの追加防除を行ったほ場では、農薬の総使用回数を超えないよう十分注意して穂いもち防除を行う。

## 2 紋枯病

### (1) 予報の内容

|      |      |
|------|------|
| 発生地域 | 県内全域 |
| 発生量  | 多い   |

### (2) 予報の根拠

- ア 7月31日現在、県予察ほ場（鳥取市橋本）における発生は平年並であるが、現地ほ場（巡回調査定点地区）における発生は平年より多い。
- イ 紋枯病の発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本病の発生は多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

病勢進展が衰えず出穂後の防除が必要な時は、病害虫防除指針等を参考にして追加防除を行う。

## 3 セジロウンカ

### (1) 予報の内容

|      |      |
|------|------|
| 発生地域 | 県内全域 |
| 発生量  | 平年並  |

### (2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯への総誘殺数は平年並である。
- イ 7月31日現在、現地ほ場（巡回調査定点地区）における発生は平年並である。
- ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

要防除水準（成幼虫数10頭／株）を超えているほ場では、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤等で直ちに防除を行う。



#### 4 トビイロウンカ

##### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯への誘殺は認められていない。

イ 7月31日現在、現地ほ場（巡回調査定点地区）での発生は認められていない。

ウ 海外飛来性害虫飛来予測システムの解析結果から、6月下旬～7月上旬にかけて複数回の飛来があったと推測される。

エ これまでの発生状況、飛来予測システムの解析結果及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、本種の発生は地域間差及びほ場間差が大きいため、ほ場における生息密度に注意し、今後の病害虫発生予察情報を参考にする。

イ 8月中旬頃のを防除水準は、成幼虫数1頭／株である。要防除水準を超えた場合は、病害虫防除指針等を参考にして、粉剤等で防除を行う。

#### 5 斑点米カメムシ類（令和8年7月22日付で病害虫発生予察注意報第4号を発表）

##### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月31日現在、早植え、極早生品種等、既に穂揃い期を迎えた水田（巡回調査定点地区）における本種の発生ほ場率は平年並であるが、すくい取り虫数は平年よりやや多い。

イ これまでの発生経過及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量は平年よりやや多いと予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

令和8年度病害虫発生予察注意報第4号(令和8年7月22日付)を参照のこと。

#### 6 コブノメイガ

##### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月31日現在、現地ほ場（巡回調査定点地区）における発生は平年並である。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

現在、本種を対象とした防除は必要ない。しかし、ほ場間差が大きいため、発生が多いほ場では、幼虫発生初期（8月第2～3半旬頃）に病害虫防除指針等を参考にして粉剤等を散布する。なお、粒剤で防除する場合は、発蛾最盛期（8月上旬頃）に散布を行う。



## 7 フタオビコヤガ

### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生量 少ない

### (2) 予報の根拠

ア 7月31日現在、現地ほ場（巡回調査定点地区）における発生は平年より少ない。

イ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生は平年より少ないと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 早生品種栽培ほ場で発生が多い場合は、穂ばらみ期～穂揃い期に防除を行う。なお、この時期は他の病害虫の防除時期と重なるので、本種にも登録のある殺虫殺菌剤などによって同時防除を行う。

イ 中生品種等、8月中旬以降に出穂するほ場では、本種の発生状況に注意し、要防除水準（暫定版：次の①～③の条件をすべて満たす場合、①発生の主体が  
1. 2 cm以上の幼虫、②被害株率90%以上、③食害葉面積率10～20%以上）を超えた場合は、直ちに防除を行う。

## [ダイズ]

## 1 紫斑病

### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生時期 平年並  
発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 大豆の成熟期は平年並と見込まれることから、本病の発生時期は平年並と予想される。

イ 向こう3か月の気象予報から、本病の発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針等を参考にして、水和剤又は粉剤を使用して防除を行う。

## 2 ハスモンヨトウ

### (1) 予報の内容

発生地域 県内全域  
発生時期 やや早い  
発生量 やや多い

### (2) 予報の根拠

ア 6～7月下旬までのフェロモントラップによる総誘殺数は平年並～やや多い。

イ これまでの発生経過及び気象経過から、若齢幼虫による被害は平年よりやや早い8月上旬から発生し始めると予想される。

ウ これまでの発生状況、現在のダイズの生育状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生量はやや多いと予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。

イ 若齢幼虫は集団で葉裏の葉肉を食害するために、表皮が残り白変葉となる。発生初期の防除は、白変葉の発生か所を中心に、捕殺（葉ごとの切除）あるいは粉剤又は水和剤等のスポット散布が有効である。



ウ 老齢幼虫に対する薬剤の効果は不十分であるため、早期発見と早期防除に努める。

### 3 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

|       |       |
|-------|-------|
| 発生地域  | 県内全域  |
| 発生時期  | 平 年 並 |
| 発 生 量 | やや多い  |

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、予察灯におけるイチモンジカメムシ、アオクサカメムシ及びホソヘリカメムシの総誘殺数は平年並である。

イ 大豆の開花期は平年並と予想されることから、本種の発生時期は平年並と予想される。

ウ これまでの発生状況及び向こう1か月の気象予報から、本種の発生はやや多いと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

病害虫防除指針等を参考にして、開花期の25～30日後と、その10日後に、粉剤又は水和剤を使用して防除を行う。

## 果 樹

### [ナ シ]

#### 1 黒斑病

##### (1) 予報の内容

|       |           |
|-------|-----------|
| 発 生 量 | やや少ない～平年並 |
|-------|-----------|

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬に行った県内巡回調査の結果、果実における発生量は平年並、新梢葉における発生量は平年に比べてやや少なかった。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）における新梢葉の発生量は平年に比べて少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年に比べてやや少ない～平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉及び収穫果実の発病を防ぐため、収穫前の薬剤散布を徹底する。

イ 発病した果実は、園外で土中に埋めるなどして速やかに処分する。

ウ 薬剤は、アリエッティC水和剤800倍液、アミスター10フロアブル1,500倍液、ストロビードライフフロアブル3,000倍液などを散布する。

#### 2 ハダニ類（カンザワハダニ、クワオオハダニ、ナミハダニ）

##### (1) 予報の内容

|       |      |
|-------|------|
| 発 生 量 | やや多い |
|-------|------|

##### (2) 予報の根拠

ア 7月中旬に行った県内巡回調査の結果、ハダニ類の発生量は平年に比べてやや多かった。

イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、慣行防除体系）におけるカンザワハダニの10葉当たりの寄生個体数は、0.1頭と平年に比べてやや多い。



ウ 向こう 1 か月の気象予報から、ハダニ類の発生に好適な条件になると見込まれ、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1 葉当たりの成虫数 1 頭を目安に防除を行う。

イ 発生密度が高い園では、散布量を増やし、丁寧に薬剤散布する。

ウ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布にあたっては、連用を避けて、輪番散布する。

エ 薬剤は、ダニゲッターフロアブル 2，000 倍液、スターマイトフロアブル 2，000 倍液、コロマイト乳剤 1，500 倍、マイトコーネフロアブル 1，500 倍液、ダニオーテフロアブル 2，000 倍液などを使用する。

3 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 7 月下旬現在、県内 9 地点のフェロモントラップ調査におけるシンクイムシ類の発生量は平年に比べてやや多くなっている。

イ モモシンクイガの越冬世代成虫の発生量は、平年に比べてやや多かった。

ウ これまでの気象経過及び向こう 1 か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第 3 世代成虫は、平年並の 8 月上中旬頃、モモシンクイガの第 1 世代成虫は、平年並の 8 月上旬頃から増加し、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。

イ 発生が多い園ではシペルメトリン水和剤（アグロスリン水和剤 2，000 倍液又はイカズチ WDG 1，500 倍液）、テルスターフロアブル 3，000 倍液などを使用する。

ウ 裸果（受粉樹に残っている果実など）はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

【カ キ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

(2) 予報の根拠

ア 昨年の発生量は平年並であり、越冬伝染源量も平年並と予想される。

イ これまでの気象経過及び向こう 1 か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、スコア顆粒水和剤 3，000 倍液、ストロビードライフロアブル 3，000 倍液などを散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い



## 発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

- ア 昨年の発生量は平年に比べてやや多く、越冬伝染源量もやや多いと見込まれる。
- イ 中国地方の梅雨入り（速報値）は、6月4日頃（平年：6月6日頃）と平年に比べて2日早く、梅雨明け（速報値）は、7月8日頃（平年：7月19日頃）と平年に比べて11日早い。
- ウ これまでの気象経過及び向こう1か月の気象予報から、発生時期はやや遅く、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 薬剤は、オーソサイド水和剤80の1，000倍液、ストライド顆粒水和剤3，000倍液、スコア顆粒水和剤3，000倍液、ストロビードライフロアブル3，000倍液などを散布する。
- イ 緑枝の硬化が進んでおり、枝への感染は春に比べて起こりにくくなっている。今後は、二次伸びの緑枝部位と果実への感染が中心となるため、ほ場の観察をしっかりと行う。
- ウ 既に形成された新梢の病斑は、主枝や亜主枝から発生した新梢で見つけやすいので、その部位を重点的に観察する。
- エ 発病が認められた新梢や果実は必ず切除して、埋めるか園外に持ち出す。

## 3 カキノヘタムシガ

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）の予察灯において本種の誘殺は確認されていない。
- イ これまでの気象経過から、第2回成虫の発生盛期は平年並の7月下旬頃で、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

- 薬剤は、オリオン水和剤40の1，000倍液、アグロスリン水和剤2，000倍液などを散布する。

## [果樹共通（ナシ、カキ、ブドウ、リンゴ、モモ）]

### 1 カメムシ類

#### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

#### (2) 予報の根拠

- ア 7月下旬現在、予察灯および集合フェロモントラップにおけるカメムシ類の誘殺数は、平年並～やや多い。
- イ 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場、ナシ‘ゴールド二十世紀’、無袋・殺虫剤無散布）において、カメムシ類の果実被害は例年と同様に確認されていない。
- ウ 7月13～14日に行った県内巡回調査の結果、カメムシ類の果実被害量は平年並であった。
- エ 向こう1か月の気象予報は、カメムシ類の加害活動に好適な条件であり、発生量は平年に比べてやや多いと予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

- ア 8月以降、第2世代成虫の発生時期となるため、果樹園への飛来が増加する恐



れがある。

イ 被害や飛来状況は、ほ場間差が大きいいため、園内外をこまめに見回り早期発見に努め、被害果実やカメムシ類の発生が多い場合は早急に防除を行う。

ウ 防除は、カメムシ類が飛来する夕方か早朝が効果的である。また、移動性が高いため、広域的な防除に努める。

エ 薬剤は樹種ごとの防除暦を参考とする。

オ 樹種によっては収穫間近となっているので、農薬の使用基準を遵守する。

## 野 菜

### 〔ネ ギ〕

#### 1 軟腐病

##### (1) 予報の内容

発 生 量      平 年 並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量は平年並である。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア ネギに傷がつくような無理な土寄せや追肥を行うと発病が助長されるので避ける。

イ スターナ水和剤2, 000倍、ヨネポン水和剤500倍、コサイド3000の2, 000倍液、Zボルドー500倍液、クプロシールド1, 000倍液などを7～10日間隔で2～3回散布する。

#### 2 白絹病

##### (1) 予報の内容

発 生 量      やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場において、本病の発生量はやや多い。

イ 本病は高温多湿で発病が助長される。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2, 000倍液、カナメフロアブル4, 000倍液、ジオゼット水和剤500倍液などを株元散布する。

#### 3 黒斑病

##### (1) 予報の内容

発 生 量      平 年 並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 本病は気温が25℃前後で、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生量は平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1, 000倍液を予防散布する。発病後は、ロブ



ラール水和剤 1, 000～1, 500 倍液、シグナムWDG 1, 500 倍液、カーニバル水和剤 1, 000 倍液などを散布する。

#### 4 ネギハモグリバエ

##### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 土寄せ時にはダントツ粒剤 6 kg/10 a の株元散布またはベストガード粒剤 6 kg/10 a の株元処理を行う。

イ 散布剤はアグロスリン乳剤 2, 000 倍液、ディアナSC 2, 500～5, 000 倍液、ファインセーブフロアブル 2, 000 倍液、グレースシア乳剤 2, 000～3, 000 倍液、ヨーバルフロアブル 2, 500～5, 000 倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400 倍液 0.4 L/m<sup>2</sup>の株元灌注も有効である。

#### 5 ネギアザミウマ

##### (1) 予報の内容

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生量はやや多いと予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 土寄せ時にはダントツ粒剤 3～6 kg/10 a の株元散布またはベストガード粒剤 6 kg/10 a の株元処理を行う。

イ 散布剤ではハチハチ乳剤 1, 000 倍液、ディアナSC 2, 500～5, 000 倍液、ファインセーブフロアブル 1, 000～2, 000 倍液、グレースシア乳剤 2, 000～3, 000 倍液などを散布する。また、ジノテフラン水溶剤（アルバリン顆粒水溶剤又はスタークル顆粒水溶剤）400 倍液 0.4 L/m<sup>2</sup>の株元灌注も有効である。

ウ 同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、ローテーション散布に努める。

#### 6 シロイチモジヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地ほ場（米子市）及び県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における、発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 現在幼虫の発生がみられるほ場では、早急に防除を行う。

イ 防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、



プレオフロアブル 1， 0 0 0 倍液、マッチ乳剤 2， 0 0 0 倍液、ディアナ SC  
2， 5 0 0 ～ 5， 0 0 0 倍液、グレーシア乳剤 2， 0 0 0 ～ 3， 0 0 0 倍液、  
ヨーバルフロアブル 2， 5 0 0 ～ 5， 0 0 0 倍液などを散布する。

## 〔ナガイモ〕

### 1 炭疽病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）における本病の発生は認められていない。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 防除薬剤は、ダコニール 1 0 0 0 の 1， 0 0 0 倍液、ジマンダイセン水和剤  
4 0 0 ～ 6 0 0 倍液などを予防散布する。

### 2 ナガイモコガ

#### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は平年並である。

イ 県予察ほ場（園芸試験場）における幼虫の発生量は平年並である。

ウ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アタブロン乳剤 2， 0 0 0 倍液、フェニックス顆粒水和剤  
2， 0 0 0 ～ 4， 0 0 0 倍液、プレバソンフロアブル 5 の 2， 0 0 0 倍液などを 7  
～ 1 0 日間隔で散布する。薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧にを行う。

### 3 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

#### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるハダニ類の発生は平年並である。

イ 向こう 1 か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 高温乾燥条件で発生量が増加する。茎葉が繁茂して薬液がかかりにくいので、丁寧に薬剤を散布する。

イ 防除薬剤は、カンザワハダニ対象に、コテツフロアブル 2， 0 0 0 倍液、ハダニ類対象にコロマイト乳剤 1， 0 0 0 倍液などを使用する。



#### 4 シロイチモジヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、県予察ほ場（園芸試験場）におけるフェロモントラップ誘殺数は  
平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期、発生量ともに平年並と予想される。

##### (3) 防除上注意すべき事項

防除適期は幼虫の若齢期で、この時期を逃すと防除が困難となる。防除薬剤は、  
デルフィン顆粒水和剤1，000倍液などを使用する。

#### [ブロッコリー]

#### 1 ハスモンヨトウ

##### (1) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 やや多い

##### (2) 予報の根拠

ア 7月下旬現在、現地調査ほ場（大山町）および県予察ほ場（園芸試験場）におけ  
るフェロモントラップによる誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報から、発生時期は平年並、発生量はやや多いと予想され  
る。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 夏季の高温乾燥条件で多発しやすい。また、幼虫の中齢期以降は薬剤の効果が低  
下するので、若齢期の防除を徹底する。

イ ブロッコリーの防除薬剤は、プレオフロアブル1，000倍液、ファルコンフロ  
アブル4，000倍液、ディアナSC2，500～5，000倍液、グレースィア乳  
剤2，000～3，000倍液などを散布する。



[おしらせ]

農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には十分注意しましょう。

農薬の詳しい登録内容は、農林水産省の「農薬登録情報提供システム」から検索で  
きます (<https://pesticide.maff.go.jp/>)

なお、農薬の使用や防除指導などに際しては、農薬のラベルを必ず御確認ください。

<鳥取県病害虫防除所ホームページ>

アドレス <https://www.pref.tottori.lg.jp/boujosyo/>



病害虫発生予察情報、フェロモントラップ調査結果（ナシのシンクイムシ類など）な  
どの参考情報、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、御利用くだ  
さい。

<お問い合わせ>

普通作物関係

〒680-1142 鳥取市橋本 260

鳥取県病害虫防除所

（電話：0857-53-1345、電子メール：byogaichu@pref.tottori.lg.jp）

もしくは

鳥取県農業試験場環境研究室

（電話：0857-53-0721、ファクシミリ：0857-53-0723）

果樹・野菜関係

〒689-2221 東伯郡北栄町由良宿 2048

鳥取県園芸試験場環境研究室

（電話：0858-37-4211、ファクシミリ：0858-37-4822）

※次回、予報第7号の発表は8月26日（水）の予定です。

なお、予定日と実際の発表日が前後することがありますので、御注意ください。

【！県内の病害虫に関する情報を配信中！】

鳥取県病害虫防除所ホームページにて病害虫予察情報を随時更新しています。  
各種情報は右の QR コードからご覧いただけます。



「7月から9月は「夏の熱中症 声かけ期間」です」  
「熱中症を防ぎましょう」  
「野焼きの延焼による山林火災に注意しましょう」  
「危ない！耕うん機はぼちぼち運転で」  
「農作業中のダニ刺咬に注意！」

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課ホームページ  
農業機械・農作業安全

<https://www.pref.tottori.lg.jp/119790.htm>



＜連絡先＞

〒680-8570 鳥取市東町 1-220

鳥取県農林水産部農業振興局経営支援課農業普及推進室  
(電話：0857-26-7327、ファクシミリ：0857-26-7294)